



海外留学の展望 丸山勇氏へのインタビュー

Timothy Newfields

プロフィール: 大学卒業後、国際文化会館（International House of Japan 1952年設立）で18年間国際交流の仕事に携わり、その後、東京財団（Tokyo Foundation 日本財団の資金により1997年に設立されたシンクタンク）で約10年、人材育成事業（特に世界各国の大学院生に対する奨学金プログラム）に携わる。2011年4月から東洋大学に勤務。国際センター（国際部）で東洋大学の国際化を進めると同時に学生がグローバルに活躍できる人材となるために、各種留学プログラム、語学研修をはじめ、様々な事業を行っている。

このインタビューは、2013年12月、丸山氏との電子メールでのやりとりと、対面で行われました。

あなたが最初に留学に興味を持たれたのは、どのようなことがきっかけでしたか？

中学から学び始めた英語が大好きだったことです。高校時代、私はニューヨーク州の田舎町に一年間、留学をしました。それは本当に人生を変えるような経験でした。そのとき私は、アメリカの公立高校に通い、米国のスケールの大きさにしばしば、感銘を受けました。そのとき以来、日本以外の国々の人々とコミュニケーションすることに、強い憧れを抱いてきました。

最近の日本人学生の 海外留学の傾向で気づいたことは、ありますか？

昨今、日本の若者は「内向き志向」だと言われてきましたが、この1~2年で少しずつ海外に目を向ける学生が増えてきたように思います。2013年9月のICEF モニターの記事によると、日本の大学生の留学への関心は、増加傾向が読み取れるようです。例えば、2013年のリクルートマーケティングによる日本人学生（対象3,200人）への調査では、わずかですが増加傾向を示しています。また、『留学ジャーナル』によると、海外留学を考える大学生の数は、2012年には前年比で12%の増加とあります。増加の背景には、政府の留学資金援助の増加が考えられます。最近の朝日新聞の記事によると、文部科学省は留学のための奨学金を2011年度には前年から約3.1億円（前年比60パーセント増）へと増額しています。

日本政府は海外留学を促進するために何か特別なことをしていますか？その中で東洋大学独自の取り組みがあれば教えてください？

文部科学省は、平成24年に「グローバル人材育成推進事業」、平成26年には「スーパーグローバル大学」事業を推進し、日本の教育の質を高め、世界のトップ100の大学のランクに少なくとも10の日本の大学を入れたいとしています。そのほか、平成25年には日本学生支援機構（JASSO）を通じての海外留学奨学金や、「トビタテ！留学 JAPAN」キャンペーンなど、日本の学生の海外留学を後押ししようとしています。

東洋大学では、海外留学する学生に対して奨学金を支給するほか、「海外留学促進奨学金」を平成24年度から始めております。これは長期の留学のみならず、短期の語学研修やボランティア、インターンシップなどにも奨学金を支給し、本学の学生が海外での経験を積むことを支援するものです。

一方で、北米の多くの大学のアカデミックプログラムに入学するためには、TOEFLの高いスコアを取得する必要があります。本学では、学生がアカデミック英語を週4回学習するための英語特別コースを併設しています。SCATとして知られているこのコースは、学生の英語によるコミュ



ニケーション力と TOEFL スコアの向上に役立つように設計されており、現在約 250 名の学生がこのプログラムを履修しています。

海外留学に興味を持たない学生がまだまだ多くいます。なぜ興味を持たないのでしょうか？彼らに興味を持ってもらうためには、どうしたら良いと考えますか？

就職活動との時期的なコンフリクト、言語能力の不足、財政的な問題などが原因としてよくあげられます。インターネットやテレビ等で海外の情報があふれている現在、もう外国のことは経験しなくてもわかる、といった思い込みや、日本の生活が快適なので、わざわざ海外に行って大変な思いをしなくても、という意識も働くのかも知れません。留学に興味を持ってもらうためには、海外に留学することがどれほどその人の視野を広げ、人間的にも成長させてくれるかを地道に伝えていくしかないでしょう。中でも、留学から帰ってきた学生には、後輩たちに自分の経験を伝えて、留学をすすめるという重要な役割があります。ですから彼らにもっと活躍してもらうことが重要だと考えます。

現在、多くの日本の大学が英語のみを話す場として、学内に「イングリッシュ・コミュニティゾーン」を設置しています。あなたは東洋大学の英語コミュニティゾーンについてどのように考えていらっしゃいますか？

学生が気軽に出入りすることができ、英語を実際に使える場として、貴重なスペースだと思います。日常的な運営を学生スタッフ（海外留学経験のある日本人学生や東洋大学に留学している外国人学生）が担当している点もユニークでしょう。ただし、英語が「できる」人のためだけの場になってはいけないので、英語の初級者も、英語に自信のない学生でも、躊躇せず入ってこられるような雰囲気やケアが必要だと思います。そのために、時々、楽しいイベントや日本語を使った「入門プログラム」を開催し、サークル活動や授業の一環としても利用してもらうなどの工夫をしています。

東洋大学には、短期語学プログラムとして、国内では「イングリッシュキャンプ」、国外では短期留学プログラムがあります。この二つのプログラムについての効果とその違いを教えてください。

短期語学プログラムは、4 週間から 6 週間、海外の協定校に行き外国語を集中的に学ぶというものです。また同時に異文化を肌で体験する良い機会ともなります。多くの場合、ホームステイをしますので、大学での授業だけでなく、日常的に外国語を使わざるを得ない環境で生活することになります。1 ヶ月程度で言語能力が急速に伸びることはあまりありませんが、異文化を体験する機会は貴重ですし、外国語を学ぼうというインセンティブになっていると思います。

イングリッシュ・キャンプは 3 泊 4 日を英語で過ごそうというもので、上記の短期語学プログラムにさまざまな理由（時期的、費用的に）で参加できない学生や、SCAT に参加していない学生など、主に英語初級者を対象に実施しています。SCAT 教員や交換留学生と触れること以外、いわゆる異文化体験はできませんが、わずかな経費で英語に漬かり、英語を「楽しむ」ことのできる貴重なプログラムです。本学では毎回約 30 名の学生がこのキャンプに参加してきましたが、今年度（平成 26 年 2～3 月）予定するキャンプには 90 名の定員に対し、130 名以上の申し込みがありました。

外国語能力の大幅な向上を図るために長期間留学する大学生は珍しいことではありません。しかし、帰国後、彼らは徐々にそれまでのスキルを失っていきます。東洋大学では、帰国した学生の外国語スキルの定着を図るために何か行っていますか？

前述の「イングリッシュ・コミュニティゾーン」は、外国語スキルを維持するための機会の一つです（特に英語）。また、LEP (Language Exchange Partner) として、外国人留学生と友達になる機会を得ます。ただ、システムティックに外国語スキルを維持・定着させるプログラムはなく、学生本人の努力に任せているのが現状です。今年度は、260 名ほどの学生が LEP として登録しています。



参考文献

ICEF. (2013, September 16). *Interest in study abroad picking up in Japan*. Retrieved from <http://monitor.icef.com/2013/09/interest-in-study-abroad-picking-up-again-in-japan/>

International House of Japan. (2013). *2012-2013 Annual Report*. Retrieved from http://www.i-house.or.jp/eng/pdf/disclo/fy2012_annualreport.pdf

International House of Japan. (2013). *IHL Annual Report 58 (Fiscal 2012)*. http://www.i-house.or.jp/eng/pdf/Annual_Report_58.pdf

Oka, Y. (2012, January 20). Governments try to nudge more Japanese to study abroad. *The Asahi Shinbun*, Economy Section. Retrieved from <http://ajw.asahi.com/article/economy/business/AJ201201300003>

留学促進キャンペーン「トビタテ！留学 JAPAN」ロゴ&スローガン記者発表会 ～官民協働で留学促進広報を強化！～ 文部科学広報 第 168 号
<http://www.koho2.mext.go.jp/168/pageindices/index20.html>